産経新聞夕刊「感・彩・人コラム」
2008年 3月 17日

難波津の春

大阪ｶﾞｽ ｴﾈﾙｷﾞｰ・文化研究所
客員研究員 弘本由香里

「難波津に咲くやこの花冬ごもり　今は春べと咲くやこの花」。『古今和歌集』仮名序に添えられた一首。冬を耐え春を迎え咲き誇る梅の花の気高さに、仁徳天皇の姿を重ねて表したといわれる歌で、仮名序の古註ではこの花とは梅の花とされている。

かくも、難波津の春を象徴する梅の花。その面影を宿すがごとく、今、大阪城梅林は、梅の盛りである。2月から3月にかけて、いつたずねても美しいものではあるが、私はとりわけ夕刻、西日を受けて輝く梅林を背に帰途につく群衆の様子を眺めるのが好きだ。どの顔もたいてい和やかで、夕陽を浴びて笑みをたたえ、足取りも軽そうに見える。

これほど多くの人々が、梅の花を目指して集まり、梅の花を愛でて幸せを感じることができる。なんでもないことのようでいて、何世紀もかけて培われてきたであろう、素朴でかけがえのない心性に触れる思いがするのである。

春の彼岸の天王寺を舞台にした能『弱法師』にも、難波津のこの花こと梅花が登場する。乞食（こ

人ら寺に満の
主躍王津、浦くみ。
の心天波しのい包中に梅ぎ
目に四難念波てをのそけか。■
盲香、難げ々色こ受い
たのけてを想、あ人景性にな
っ梅受し土と、いくの心代は
な、にそ浄りた普春な次で
とが袖。楽あうずのかに化
身を極にをわ津豊も文
の師」ら語に心々問波たとき
法びを陽は数を難れとべ
き）弱花起夕山の賤、さ陽る
じ「、縁む青景貴む出夕誇
つ公せ目致　込きやい
せの沈